

易緯について（一）

——乾鑿度・乾坤鑿度——

中 村 璋 八

一、易緯とその篇目

易緯⁽¹⁾は、夙に白虎通徳論、卷八、天地に、

乾鑿度曰、太初者氣之始也。太始者形兆之始也。太素者質之始也。陽唱陰和、男行女隨也。天道所以左旋、地道右周。

と、その一篇である「乾鑿度」の文が引用されている。この文は、現行本易緯乾鑿度に、

太易者未見氣。太初者氣之始也。太始者形之始。太素者質之始。氣形質具而未相離。故曰渾淪。（中略）故陽唱而陰和、男行而女隨。天道左旋、地道右遷。

と、太初の前に太易をも具えて、より整った型で見存している。この記載から推すと、現行本易緯乾鑿度の文は、既に後漢に、その原型が存したことは明らかである。しかし、後漢時代には、この白虎通所引の文を除いては、易緯の引用は存しない。

南朝、宋の范曄の撰になる後漢書、郎顗伝・楊賜伝になると易内伝・易天人伝・易中孚伝(経)・易伝などの文が見えるが、これらの多くは、章懷太子注も指摘するように易緯稽覽図の文と極めて近似している。このことは、後漢末期までは、易緯の型は整いつつあったが、乾鑿度を除いて、まだその篇名が定着していなかったことを示すのではあるまいか。乾鑿度のみは、後漢書律曆志に、更に

乾鑿度、八十分之四十三爲日法。設清臺之候、驗六異、課效稱密、太初爲最。

元命苞、乾鑿度皆以爲、開闢至獲麟、二百七十六萬歲。

など見え、白虎通の記載と共に、乾鑿度の通行の古いことを示している。

その後も、魏志文帝紀裴松之注に運期、晋書五行志に萌氣枢、宋書礼志に通卦驗、符瑞志に運期識・萌氣枢、五行志に萌氣枢、顔氏家訓に易統通驗玄図、玉燭宝典に乾鑿度・通卦驗・是類謀・坤靈図、天文要録に易緯紀・紀表・決象・礼觀書・統驗玄図、天地瑞祥志に通卦驗・是類謀、隋書律曆志に通卦驗、王邵伝に乾鑿度・稽覽図・坤靈図などの篇名と、その佚文が散見する。これらの篇名を整理しているのが、後漢書方術伝所載、樊英伝の七緯に對する唐の章懷太子李賢注である。そこには、他の緯書の篇名と共に「易緯、稽覽図・乾鑿度・坤靈図・通卦驗・是類謀・弁終備也。」と、六篇が記されている。この中には、前挙の天人伝・運期識・萌氣枢などは見えない。ただ、この六篇は、宋代の偽作とされる乾坤鑿度・乾元序制記を除くと、易緯八種と一致している。このことは、李賢注所引の易緯六篇が、易緯の中で最も信頼できる篇であることを示す。

易緯は、隋書經籍志、經籍一、易の部に「易緯八卷、鄭玄注、梁有九卷」唐の李鳳撰の天文要録⁽²⁾に「易緯六卷、鄭玄注」と載せられているが、その篇名はなく、旧唐書經籍志、甲部經の識緯類に「易緯九卷、宋均注」と、また、新唐書芸文志、識緯類にも「宋均注易緯九卷」と記されている。隋志が「八卷、鄭玄注」天文要録が「六卷、鄭玄注」としているのに対し、新・旧唐志、何れも「九卷、宋均注」として異なる。そして、これら「六卷」「八

卷」乃至「九卷」の内容が如何なるものであったかも明らかでない⁽³⁾。更に宋史芸文志、經の易類に「易緯乾鑿度三卷・易緯七卷・易緯稽覽圖一卷・易通卦驗二卷、並鄭玄注」と、乾鑿度・稽覽圖・通卦驗と篇名を記したもののほか、易緯と包括したものとに分けて記している。篇名の記された三書は、現行本も上下二卷であり、他の篇に比して整ったものである。すると、易緯七卷は、坤靈図・是類謀・弁終備（何れも現行本は一卷）のほか、宋代の疑作とされる乾坤鑿度・乾元序制記などを含むのではあるまいか。

王堯臣等の編になる、北宋時の朝廷の文庫の目録、崇文總目（一〇四一年成立）には「易緯九卷、周易乾鑿度二卷」が記され、晁公武（一一四四年頃）の郡齋讀書志、卷一上に「易緯乾鑿度二卷、右旧題蒼頡修、古籀文、鄭玄注」と、また、讀書後志、卷一に「坤鑿度、右旧題曰、包羲氏先文、軒轅氏演古籀文、蒼頡修」のほか「周易緯稽覽圖二卷・周易緯是類謀一卷・周易緯弁終備一卷・周易緯乾元敍制記一卷・周易緯坤靈図一卷・易緯通卦驗二卷、右鄭玄注」が記されている。鄭樵（一一〇四—一二六二）の通志、芸文略、經類第一、易の部には「乾坤鑿度二卷、伏羲文、黃帝演、倉頡修注・乾鑿度二卷、鄭玄注・易緯稽覽圖七卷、鄭玄注・京房易鈔一卷、右識緯、四部、十二卷」とある。この「易緯稽覽圖七卷」は、或は「易緯七卷」であるまいか。端平（一二三四—一二三六）頃の安吉（浙江省）の人、陳振孫の直齋書錄解題、卷三、識緯類には「易緯七卷、漢鄭康成注・易緯稽覽圖三卷・易緯通卦驗二卷、鄭康成注・易乾鑿度二卷、亦鄭氏注・乾坤鑿度二卷」とある。また、常州無錫（江蘇省）の人、尤袤（一一二五—一一九四）の遂書堂書目、周易の部には、「乾鑿度・易緯・坤鑿度・周易通卦驗」の名が散見するが、その卷数は記されていない。

これら宋代の目録類に記されている易緯、又はそれぞれの篇の種類や卷数は同じでなく、原本に当って記したか、どうかは甚だ疑問であり、或は誤った記述もあるのではあるまいか。例えば、通志の「稽覽圖七卷」は、稽覽圖の卷数としては甚だ多い。或は、直齋書錄解題の「易緯七卷」と関係があるのではないだろうか。すると、直齋

書録解題の乾鑿度・乾坤鑿度は別としても、「稽覽図三卷」「通卦驗二卷」との関係はどうなるのか、問題がある。やはり「易緯七卷」は、宋志と同じく乾鑿度・稽覽図・通卦驗の主要な三篇を除く他の篇の卷数を示したと考えた方が妥当と思われる。では「稽覽図七卷」は如何に考えるべきであろうか。

元の馬端臨の文献通考、経籍十五になると「易乾鑿度二卷・坤鑿度二卷・坤鑿度二卷・周易緯稽覽図二卷・是類謀一卷・弁終備一卷・乾元序制記一卷・坤靈図一卷・通卦驗二卷・易稽覽図三卷・乾坤鑿度二卷」と、現行本の易緯八種の全ての名が、卷数は同じで見えている。ただ、稽覽図のみは、二卷本と三卷本とが記され、両者は「詳備不同」としている。すると、稽覽図は、異なった二本が通行していたことになる。これは稽覽図が重要視されていたことを示すのではあるまいか。これが「稽覽図七卷」と関係があると推せる。また、「坤鑿度二卷」と「乾坤鑿度二卷」とが別の書として記されている。

この宋代に通行していた易緯が、明の永樂五年（一四〇七）に完成した永樂大典に収められ、それが清の乾隆（一七三六—一七九五）に編集された四庫全書に採られ、また、乾隆四五年（一七八〇）于敏中・王際華等に拠って、四庫全書中の菁華をとって「薈要」が作られ、「易緯十二卷、八冊」も、その中に含まれた。この四庫全書（文淵閣本）と四庫全書薈要とは、共に台北市の国立故宫博物院に現蔵されている。乾隆三十七年（一七七二）紀昀等の撰になる四庫全書総目提要、卷六、経部六、易類六、附録に永樂大典本の「乾坤鑿度二卷・周易乾鑿度二卷・易緯稽覽図二卷・易緯弁終備一卷・易緯通卦驗二卷・易緯乾元序制記一卷・易緯是類謀一卷・易緯坤靈図一卷」・「易緯八種、十二卷」が収められ、その解説がなされている。その殆んどは、永樂大典本が唯一の原本であるが、周易乾鑿度のみは「明の錢叔宝の旧本を採用して、互に校正し、若干の文字を増減した。」として、明の刊本の存したことを記している。

二、明代の刊本

四庫全書總目提要が言及する如く、四庫全書以前に、明の錢叔宝本が存した。この書は、雅雨堂藏書十種（盧見曾輯）に収められている。それには、乾隆丙子（二十一年・一七五三）の德州の盧見曾の次の如き「序」がある。

周易乾鑿度二卷、（中略）或曰、緯書非學者所尙、是不然。聖人作經、賢人緯之。經粹然至精、緯則有駁有醇。成哀之緯、其辭駁。先秦之緯、其辭醇。乾鑿度先秦之書也。去聖未遠、家法猶存。故鄭康成漢代大儒、而爲之注、唐李鼎祚作易傳。是時緯候具在、獨取乾鑿度、非以其醇耶。此書前明刊本流傳、而多闕誤。茲得之嘉靖中吳郡錢君叔寶藏本、不失舊觀、爲梓而行之、以備漢學。世所傳乾坤鑿度、文義淺陋、陳直齋謂崇文書目無之。至元祐田氏書目始載。是國朝人依託爲之、非此書之比也。

即ち「周易乾鑿度二卷は、他の緯書が、前漢の成帝・哀帝の時の書で、その辭が駁なのに対し、先秦の書である。だから、漢の鄭玄が、この書に注をし、唐の李鼎祚も易伝を作った。この書は、前に明刊本が流伝していたが、それは闕けたり、誤ったりした処が多かった。今、明の嘉靖（一五二二—一五六六）中の吳郡の錢叔宝の藏本を得たが、それは古い型を失っていない。そこで版本にして通行させ、もって漢學に備えた。世に伝わるところの乾坤鑿度は、文章の意味が浅く陋つていて、陳振孫の直齋書錄解題に、崇文書目には乾坤鑿度の名がない、と言っている。宋の元祐（一一〇八—一一〇九）の田氏書目になって始めて載せている。これは宋朝の人が依託して作ったもので、乾鑿度のたぐいの書ではない」と述べている。乾鑿度が、先秦の書であることには問題があるが、乾坤鑿度に比べて醇であることは事実である。

この「序」で言う明刊本とは、范欽本のことと思われる。この范欽本は、天一閣叢書（二七種、二〇冊本と一八種、一二冊本とがある）及び范氏二十種奇書（明嘉靖間四明范氏刊本、六四卷、四〇冊）に乾坤鑿度と共に収めら

易緯について (一)

表I 乾鑿度異同表(一部)

題。君。亦。以。形。伏。經。其。四。倣。成。	釗。德。言。決。見。羲。天。氣。時。易。爲。	表。正。無。羅。焉。聖。地。栗。節。道。	武英殿本
顯。得。偏。法。貌。羲。繼。變。栗。効。			范欽
顯。得。偏。法。貌。羲。繼。變。栗。効。			緯書
○。得。○。○。○。羲。繼。○。栗。佼。		德爲道	錢本
顯。○。偏。法。○。羲。○。○。栗。○。			七緯
○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。			古經
顯。○。偏。法。○。羲。○。○。栗。○。			黃氏

れている。⁽⁴⁾併し、武英殿聚珍書本は、乾坤鑿度が范欽本と校合しているのに対し、乾鑿度は、錢叔宝本と異なる部分が多いにもかかわらず、全く触れていない。⁽⁵⁾これは如何なる理由に拠るのであろうか。盧見曾が指摘するように闕誤が多く、善本でなかったために無視したとも考えられる。

この范欽本に拠ったものに、明の楊喬嶽編、杜士芬校の「緯書」⁽⁶⁾所収の乾鑿度がある。この書は、十数箇所誤植を除いて范欽本と全く同じである。

明刊本の「周易乾鑿度」は、以上の如くであると思われる。

乾坤鑿度に就いては、四庫全書総目提要は触れていないが、この書にも范欽本が存した。そして、武英殿聚珍版書本は、范欽本と校合し、二十五箇所の異同を挙げ、そのうち十六箇所は、范欽本を正しいとして訂正している。武英殿本が指摘したほかに、天一閣叢書第一冊目の乾坤鑿度と武英殿本とを校合すると、六十余箇所に上る異同が認められる。すると、この范欽本は、現行本と異なる貴重な刊本であることとなる。

また、内閣文庫蔵の「乾坤鑿度」も、この范欽本系統の刊本である。この書は、巻首に錢塘（浙江省、杭州）の許当世（彦輔）の「序」があり、更に錢塘の金宗化（玄度）と楊之森（秀夫）が校したことが篇首に記されている。また、本文の上段には、二十六条の注記もある。そして、明の天啓丙寅（六年、一六二六）仲春の唐琳（玉林）の「序」の存する「古三墳」と合刻されて一冊となっている。この書と天一閣本を校比すると、その異同は十六箇所であるが、その殆んどは、内閣文庫本の誤植と推せるものである。この乾坤鑿度の第五葉には「乾鑿度」が一葉混入している。これは、これと同一の「乾鑿度」の明刊本が存したことを示すのであろう。

更に台北の中央研究院、歴史語言研究所に、後周、衛元崇の「元包」と合冊になる「乾鑿度上下」（実は乾坤鑿度）の鈔本が蔵される。この書は、無注本で、奥書もなく、その藍本や鈔写の時期も明らかでないが、范欽本に近い。その二、三の異同は、何れも歴史語言研究所本の誤写と推せるものである。

これと殆んど同じ一本に「說郭裏」（四照堂蔵版）所収の「乾鑿度上下、古本」（実は、これも内容は乾坤鑿度）がある。この「說郭裏」には、張居昌の「紋」に続いて漳浦（福建省）の人、陳時（三陟）の癸未冬至の「眉言」と「說郭裏四例」あって、この書と原本說郭との関係を詳述している。

その他、明代の目錄類には、焦竑（一五四一—一六二〇）の經籍志、經類、易の部に、「乾坤鑿度二卷、鄭元注。易緯稽覽図二卷、鄭元注。易緯是類謀一卷。易緯弁終備一卷。易緯乾元序制記一卷。易緯坤靈図一卷。易緯卦通驗二卷。京房易鈔一卷、右識緯」と記される。ここには「坤鑿度」の名が見えないが、これは、当時、歴史語言本や

易緯について（一）

表Ⅱ 乾坤鑿度異同表（一部）

武英殿本	抵。生。改。三。帝。八。息。乾。不。以。茹。茹。生。抵。	本。性。血。毛。御。備。大。大。起。成。氣。擗。資。地。上。
范欽	氏。天。也。御。文。ナシ。悉。器。櫛。土。蟬。	
内閣	氏。天。也。御。文。ナシ。悉。器。櫛。土。蟬。	
歴史	○。○。○。御。文。ナシ。悉。器。櫛。ナシ。	
説郭裏	○。○。○。御。文。ナシ。悉。器。○。ナシ。	
芸海	○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。	
七緯	○。○。○。○。○。○。文。○。○。○。○。○。	
古経	○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。○。	
黄氏	○。○。○。○。○。○。文。○。○。○。○。○。	

説郭裏本の例もあるように「乾坤鑿度」と混同していたためではなからうか。また、鄭樵の通志と同じく、「京房易鈔」をも識緯としている。この経籍志は、尚書緯・尚書中候・春秋緯・孝経緯を記しているが、礼緯と楽緯はない。その他、泰和（江西省）の人、楊士奇（一三六五—一四四四）の文淵閣書目、易の部に「易乾鑿度一部、闕」とあり、陽湖（江蘇省）の人、孫星衍の孫氏堂書目内篇（嘉慶五年、一八〇〇の序）には、明の蔡文範刊本の存したことを記している。

三、武英殿聚珍版書本について

明の永樂五年（一四〇七）一月に完成した永樂大典（二二八七七卷、凡例、目錄六〇卷、一一〇九五冊）に収められた易緯は、清の乾隆年間（一七三六—一七九五）に総纂官の紀昀・陸錫熊・孫士毅等に拠って編集された四庫全書に採られた。

この四庫全書は、文淵閣（北京、紫禁城内）、文源閣（北京城外、円明園）、文溯閣（瀋陽、離宮）、文津閣（熱河、離宮）、文宗閣（江蘇省、鎮江金山寺）、文匯閣（江蘇省、揚州大觀堂）、文瀾閣（浙江省、杭州孤山聖因寺行宮）の七閣に分蔵された。

乾隆帝は、これらの文籍の中から稀覯の書、世道人心に裨益ある書及び考鏡に資するに足る文献を選んで刊行することを命じた。丁度、その時、朝鮮の人である董武英事の金簡が、木版を作つてこの事業を遂行したき旨を上疏した。この金簡の提案は、帝の嘉納するところとなり、ここに木版字二千万余を作成して印刷にあたらしめた。これが、乾隆四八年（一七八三）に成つた武英殿聚珍版全書である。この聚珍版全書は、各々の巻首に「提要」が挙げられ、校上の年次と纂修官の名とが記され、校正の厳密が期されている。このうち易緯は、乾鑿度が、永樂大典本に拠りながら、当時通行していた錢叔宝本と校合され、二〇余箇所（8）の異同を指摘し、八箇所が錢本に拠つて訂正されている。また、乾坤鑿度も、明の范欽本と校合し、二五箇所の異同を指摘し、一六箇所を訂正している。その他、乾鑿度が二箇所、乾坤鑿乾が一二箇所、校者の考えに拠つて訂正されている。

その当時、刊行された武英殿聚珍版書は、凡そ一四〇種から一五〇種にも及んでいる。その原刊本は、今は容易に見ることは出来ないが、楓山文庫旧蔵の内閣文庫本（四六種、一九二冊）は、この系統の一本と思われる。その他、日本に存するものには、閩刻本（福建、一三九種、靜嘉堂文庫には五〇〇冊本と六六〇冊本、東大東洋文化研

究所蔵は六八七冊、東洋文庫本は一二五種、三二八冊、内閣文庫蔵は一五種、七六冊、これには易緯はない。また、東大図書館蔵、駒沢大学蔵は一三七種、原闕二種、八一〇冊、何れも、乾坤鑿度、乾鑿度、通卦驗の巻後に、道光八年—一八二八—五月、福建布政使南海吳榮光重修、とある。それぞれ若干の異同がある。）浙江本（杭州、乾隆四二年、内閣文庫蔵は、三一種、一一九冊、静嘉堂文庫蔵国会図書館蔵は、三八種、一二四冊、その他、東大東洋文化研究所蔵、六一冊、同図書館蔵、三〇冊）江南本（乾隆四二年、内閣文庫蔵は三六種、六二冊、宮内庁書陵部に程式一冊）江西本（南昌、東洋文庫蔵は五四種、一二八冊、その他早大図書館蔵もある）光緒重修本（光緒二五年、一五五種、七八八冊）広東本の系統の広雅書局本（光緒二五年、一五五種、八〇一冊、東大中哲文・東北大・京大人文等蔵）また、蘇州本（八種）など存するが、何れも収めた種類や冊数が異なる。各本には、それぞれ「易緯八種」が収められているが、その配列の順序は違う。通行本（四部集要）と比較してみると「表Ⅲ」の如く

表Ⅲ 武英殿本各篇の順序

四部集要	内閣	閩（静）	閩（洋）	閩（駒）	浙・江西	江南	光緒	廣雅
一、乾坤鑿度	乾坤	乾坤	乾元	稽	乾	乾	乾坤	乾坤
二、乾鑿度	乾	乾	坤	通	乾坤	乾坤	乾	乾
三、稽覽度	稽	稽	弁	乾元	稽	稽	稽	是
四、弁終備	弁	弁	是	坤	弁	弁	弁	乾
五、通卦驗	乾元	通	乾	弁	乾元	乾元	通	通
六、乾元序制記	坤	乾元	乾坤	是	坤	坤	乾元	坤
七、是類謀	是	是	稽	乾	是	是	是	稽
八、坤靈図	通	坤	通	乾坤	通	通	坤	乾元

易緯について（一）

表Ⅳ 武英殿本異同表（一部）

四部集要	内閣	閩	浙江	江西	江南	光緒	廣雅
帝。釐。氏。 竜。啣。出。 其。物。不。通。 无。成。有。終。 日。月。相。對。 茹。為。二。儀。 分。為。二。儀。 而。殊。之。 今。八。元。者。 載。於。于。上。也。	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	釐 ○ 共 ○ 將 ○ 崢 於 ○ 入 土	釐 銜 ○ 无 將 崢 於 除 入 土	釐 ○ 万 ○ 无 將 崢 於 ○ 入 土	○ ○ ○ ○ 將 ○ 於 ○ 除 入 土	釐 ○ 共 ○ 將 ○ 崢 於 ○ 入 土	釐 ○ 共 ○ 將 ○ 崢 於 ○ 入 土

である。東大中哲文研究室蔵広雅書局本は、目録と実物とが異なるので、上段に目録、下段に実物の順序を示した。閩刻本も、それぞれ異なる。「乾坤鑿度」と「乾鑿度」何れを先にするかも、各本によって同じでない。⁽⁹⁾

また、武英殿聚珍版書の各本は、乾鑿度・乾坤鑿度の二篇に限ってみても、それぞれ若干の文字の異同が見られる。その一例を挙げると「表Ⅳ」の如くである。通行本の四部集要本は、楓山文庫旧蔵の内閣文庫本と全く同じであり、刊記は存しないが、この系統の書に拠ったと推せる。⁽¹⁰⁾

この武英殿聚珍版書の「易緯八種」の各々の巻首には、「提要」が挙げられている。それに拠って各易緯の性格を知ることが出来る。今、乾鑿度と乾坤度の「提要」を記し、研究の資とする。

周易乾鑿度二卷 永樂大典本（文淵閣本、薈要本無永樂大典四字）

按周易乾鑿度鄭康成注與乾坤鑿度本二書。晁公武竝指爲倉頡修古籀文、誤（文本作悞）併爲一。永樂大典遂合加標目。今考宋志有鄭康成注易乾鑿度三卷、而不及乾坤鑿度、則知宋時固自單行也。說者稱其書出於先秦。自後漢書・南北朝諸史及唐人撰五經正義・李鼎祚作周易集解（文本、薈本無集解二字）、徵引最多。皆於易旨、有所發明。較他緯、獨爲醇正。至於太乙・九宮・四正・四維、皆本於十五之說、乃宋儒載九履一之圖所由出。朱子取之、列於本義圖說。故程大昌謂、漢魏以降、言易學（文本、薈本作老）者、皆宗而用（文本作明）之、非後世所託爲。誠稽古者、所不可廢矣。原本文字斷闕（文本、薈本作缺）、多有譌（文本、薈本作訛）舛。謹依經史所引各文、及傍采明錢寶舊本、互相（文本作明）校正、增損若干字。其定爲上下二卷、則從鄭樵通志之目也。

文淵閣本四庫全書（文本） 四庫全書薈要本（薈本）と校合した。

案ずるに周易乾鑿度鄭康成注と乾坤鑿度とは、もともと二書。晁公武は、竝びに指して倉頡修、古籀文と爲し、誤りて併びに一と爲す。永樂大典、遂に合して標目を加ふ。今宋志を考ふるに鄭康成注易乾鑿度三卷ありて、乾坤鑿度に及ばざれば、則ち宋の時、もとより自ら單行せるを知るなり。説く者、其の書の先秦に出づるを稱す。後漢書・南北朝の諸史より唐人撰せる五經正義・李鼎祚作る周易集解に及ぶまで、徵引すること最も多し。みな易旨に於いて發明するところあり。他の緯に較べ、獨り醇正たり。太乙・九宮・四正・四維に至るまで、みな十五の説に本づくは、乃ち宋儒の戴一履九の圖に由りて出づる所なり。朱子これを取り、本義の圖説に列す。故に程大昌謂ふ、漢魏以降、易學を謂ふ者は、みな宗としてこれを用ひ、後世の託爲せる所に非ず。誠に古を稽ふる者は、廢すべからざる所なり。原文は文字斷闕にして、多く譌舛あり。謹んで經史の引く所の各文に依り、及び傍ら明の錢叔寶の舊本を採り、互に相ひ校正し、若干の字を増損す。其の定めて上下二卷と

爲すは、則ち鄭樵の通志の目に從へるなり。

乾坤鑿度二卷 永樂大典本（文本・舊本無永樂大典四字）

案乾坤鑿度（度下、文本・舊本有二卷二字）隋唐志・崇文總目、皆未著錄。至宋元祐間始出。紹興續書目、有倉頡注鑿度二卷、後以鄭氏所注乾鑿度有別本單行。故亦稱此本爲《鑿度》。程龍謂、隋焚讖緯、無復全書、今行於世、惟乾坤二鑿度是也。其書分上下文、各爲一篇。上篇論四門四正取象取物、以至卦爻著策之數。下篇謂坤有十性、而推及於蕩配凌（文本作陵）配、又雜引萬形經・地形經・制靈經・著成經、含靈孕諸緯文、詞多聾牙、不易曉。故晁公武疑爲宋人依托。胡應麟亦以爲元包洞極之流。而胡一桂則謂漢去古未遠、尙有祖述、有裨易教。評騭紛然、眞僞莫辨。伏讀題乾坤鑿度詩、定作者後於莊子。而舉應帝王篇所云、儵忽混沌、分配乾坤太始、以推求鑿字所以命名之義。援據審核、折衷至當。臣等、因考列子・白虎通・博雅諸書、皆以太易太初太始太素、爲氣形質之始、與鑿度所言相合。獨莊子於外篇天地略及太初有無之語、而其他名目、概未之見、則儵忽混沌、實卽南華氏之變文。作鑿度者、復本其義、而緣飾之耳。仰蒙聖明剖示、精確不刊、洵永爲是書定論矣。按七經緯皆佚於唐、存者獨易。逮宋末而盡失其傳。今永樂大典所載、易緯具存、多宋以後諸儒所未見、而此書實爲其一。謹校正訛缺、釐勘審正。冠諸緯之首、而恭疏其大旨於簡端。

案ずるに乾坤鑿度は、隋・唐志、崇文總目、みな未だ著錄せず。宋の元祐間に至りて始めて出づ。紹興續書目に、倉頡注鑿度二卷あり。後に鄭氏の注する所の乾鑿度を以て、別本の單行するあり。故にまた此の本を稱して《鑿度》と爲す。程龍謂ふ、隋は讖緯を焚き、復た全書なく、いま世に行はるるは、ただ乾坤二鑿度のみと是なり。其の書は、上下の文に分ち、各々一篇と爲す。上篇は、四門・四正・取象・取物を論じ、以て卦爻・著策の數に至る。下篇は、坤に十性ありと謂ひて、蕩配・凌配に推及し、また雜ふるに萬形經・地形經・制靈經・著成經・含靈孕の諸緯文を引くも、詞多聾牙にして、曉り易からず。故に晁公武、疑ひて宋人の依托と爲

す。胡應麟も、また以て元包・洞極の流と爲す。而して胡一桂は、則ち漢は古を去ること未だ遠からず、尙ほ祖述ありて、易教に裨することあり、と謂ふ。評隲紛然として、眞偽辨ずるなし。伏して御製の乾坤鑿度に題するの詩を讀むに、定め作る者は、莊子に後るると爲す。而して應帝王篇の云ふ所の儵・忽・混沌を擧げて、乾・坤・太始に分配し、以て鑿字の命名する所以の義を推求す。援据は審核にして、折衷も至當なり。臣等、因りて列子・白虎通・博雅等の諸書を考ふるに、みな太易・太初・太始・太素を以て、氣・形・質の始めと爲し、鑿度の言ふ所と相ひ合ふ。獨り莊子のみ、外篇の天地略に於いて、太初に無ありの語に及び、而して其の他の名目、概ね未だこれを見ざれば、則ち儵・忽・混沌は、實に即ち南華氏の變文。鑿度を作る者は、復た其の義に本づきて、これを縁飾するのみ。仰ぎて聖明の剖示を蒙り、精確に刊せず、洵に永く是の書の定論と爲す。按ずるに七經緯は、みな唐に佚す。存する者は獨り易のみ。宋の末に逮びて、盡く其の傳を失す。いま、永樂大典に載するところ、易緯、具に存するも、多く宋以後の諸儒の未だ見ざる所にして、此の書は、寔に其の一たり。謹みて訛缺を校定し、釐勘すること審正。これを易緯の首に冠し、恭しく其の主旨を簡端に疏す。

四、武英殿聚珍版書本以後の刊本

武英殿聚珍版書本以後の易緯の刊本は、全て武英殿本を藍本としている。

まず、乾隆末の聽彝堂刻本である藝海珠塵（吳省蘭、八集、一六四種所收）土集には、乾坤鑿度のみ收められているが、この書は、殆んど武英殿本を、そのまま襲っている。ただ、四部集要本と校比すると、二、三の異同があり、それは、「表Ⅱ」に示した如く、浙江（杭州）本と同じである。これは、浙江本に依拠したことを示すのではないだろうか。

七緯（趙在翰、嘉慶一四年、一八〇九刊）は、易緯八種、全てを收めるが、これも武英殿本を、そのまま踏襲し

ている。併し、これも乾鑿度に十一箇所、乾坤鑿度に十二箇所の武英殿本との異同がある。そして、その異同は、明の范欽本と一致する。趙在翰は、その敍「易緯敍録」には、范欽本に就いて、全く触れていないが、武英殿本の誤りを范欽本に拠って訂正した推せる。

番禺（広東省）の人、劉昌齡と陶福祥の校した古経解彙函（鐘謙鈞、同治一三年、一八七四、広州刊）本易緯八種も、武英殿本に拠るが、四部集要本や広雅書局本と若干の相違がある。例えば、乾坤鑿度に「其物不通」とある「其」を、閩刻本や広雅書局本は「其」に作るが、古経解彙函本は、江西本と同じく「万」に作っている。これから推すと江西本に近いことになるが、江西本とも二、三の相違がある。広州の人である校訂者が、広州本に拠りながら、他本とも校比して訂正したものであろう。

次に全本ではないが、易緯の最も秀れた校訂書である武進（江蘇省）の人、張惠言の易緯略義（三卷、嘉慶・道光刊本、張臯文箋註全集。張氏叢書・茗柯全集等所収、また、光緒中刊本・広雅叢書本もある）がある。易緯略義は、易緯八種のうち、乾坤鑿度は偽書であり、乾元序制記も、宋人の鈔撮したものが作った書であり、また、坤靈図・是類謀・弁終備は、亡佚が多く、その要旨が不明であり、やや完存に近い書は、乾鑿度・稽覽図・通卦驗の三篇のみとし、この篇の中から、その醇なるもの乾鑿度一八、稽覽図一五、通卦驗一三条を取り出し、易三義・易類一七九・上下経・六位・八卦用事・六日七分・七十二候・六十四卦主歳（以上巻一）卦軌・入厄・卦氣・風雨・雷・霜・水旱（以上巻二）通卦驗八卦候・六十候・二十四氣候・図書（以上巻三）などに分類・整理して載せている。張惠言は、これらの条文に、五経注疏・後漢書注・その他の正史・文選李善注・初学記などに引存する易緯の佚文や錢叔宝本と校比して、詳細な校勘と註を施し、武英殿本の誤を訂している。更にその子、張成孫は、江蘇校刊の聚珍四庫本と校比し、その多くの文字の異同を指摘し、また、蕭祐誠の「案」語も附されている。この張惠言、張成孫の校註の中には、難解な易緯を解するに、極めて貴重な見解が多々示されている。

この張惠言の説を採用し、それに拠って武英殿本を改めている黄氏逸書考（黄奭、民国丁丑、一九三〇刊、漢学堂叢書通緯逸書考^⑪、光緒十九年、一八九三、子禮集成刊本）本の易緯がある。黄氏逸書考所収の易緯乾鑿度は、武英殿本と錢叔宝本との異同、二〇箇所を指摘しているのを始め、後漢書注・詩疏・李鼎祚易伝・文選注・太平御覽・初学記・事類賦・開元占経・清河郡本所引の緯書と校比しているが、最も多いのは易緯略義で、実に一二〇余箇所^⑫に及び、易緯略義の説に拠って訂正している箇所は極めて多い。これらの張惠言の説は、「重修緯書集成卷一、上」の校勘に全て挙げた。乾坤鑿度も、困学紀聞等所引と校合している。（表Ⅰ・表Ⅱ、参照）

また、瑞安（浙江省）の人、孫詒讓（一八四八—一九〇八）の札迻（光緒二〇年、一八九四、瑞安孫氏籀膏刊本）巻一には、易乾鑿度鄭康成注・易稽覽図鄭注・易通卦驗鄭注・易是類謀某氏注・易坤靈図鄭注・易乾元序制記鄭注の六種の考証が収められている。この書は、武英殿本と易緯略義とを底本とし、それらと范欽本・盧見曾本（即ち錢叔宝本）、その他、諸文献に引存する易緯の佚文と校比している。その中で、特に注目されるのは、中国では夙に逸し、日本にのみ伝存する隋の杜台卿の玉燭宝典（原本は前田家尊経閣文庫蔵、古逸叢書所収、光緒一〇年、一八八四刊、その後、古鈔本影印卷子本、昭和一〇年刊などがある）に引用された易緯の佚文に拠って、多くの校定をしていることである。

その他、畿輔叢書（王灝、光緒中刊）に、弁終備・通卦驗・乾元序制記・坤靈図の四種が、鄭学彙函（闕名、刊本）に、乾鑿度・弁終備・通卦驗・坤靈図・乾元序制記の六種が収められているが、これらは何れも武英殿聚珍版本に拠っている。

注

（一） 易緯については、拙稿「易緯佚文より見たる現行本易緯の性格について」（内野博士還暦記念東洋学論集所収）及び「緯

- (2) 書の基礎的研究」国書刊行会刊) 第二編、資料篇、第二章、各緯における問題点、1 易緯、の項で述べた。
- (2) 拙著「日本陰陽道書の研究」(汲古書院刊) 余論、第一章 天文要録について。
- (3) ただ乾鑿度など現行本が上下二巻になっているものもあるので、六種のうち、乾鑿度、稽覽図、又は通卦驗が二巻として数えられたとも考えられる。
- (4) その他、内閣文庫本、乾坤鑿度の上巻、乾鑿度、第五葉の一葉のみ周易乾鑿度が混入している、これは、内閣文庫本乾坤鑿度と同一の周易乾鑿度も存したことを示すのであろう。
- (5) 「表I」参照。
- (6) 拙稿「内閣文庫本『緯書』について」(漢魏文化6号所収) 参照。
- (7) 「表II」参照。
- (8) 閩刻本にある同治七年孟冬月の福建布政使鄧延枬の「識語」に拠ると、始め一二〇種であったが、宋版の五經書等を増入し、一三五種となった、としている。
- (9) 通行本は、乾坤鑿度を首に置くが、「重修緯書集成、卷一上」(安居香山・中村璋八編)では、黄氏逸書考に拠って、信賴のおける乾鑿度を首に置いた。
- (10) この各本の異同は「重修緯書集成卷一上」で指摘した。
- (11) この両書の関係については、拙稿「黄氏逸書考通緯と漢学堂叢書通緯逸書考」(重修緯書集成、卷二所収)を参照。
- (12) 安居香山・中村璋八編「重修緯書集成」(明德出版刊)は、卷二・卷三・卷五・卷六は既刊。本論は、卷一、上(易緯)の「解説」を兼ねるものである。